学校をつくろう!通信

がっこう・N.P.O.
珊瑚舎スコーレ

第135号

学校の役割　　その １１４

ＮＰＯ法人珊瑚舎スコーレは２０２１年度から高等部を学校法人化して高等専修学校として運営する準備を進めています。先日、そのために必要な「寄付行為認可申請書」と「学校設置認可申請書」の二つの申請書を沖縄県知事あてに提出しました。１年かけて審査が行われます。添付書類として提出した設立趣意書をご紹介します。（ほ）

設立趣意書

珊瑚舎スコーレ高等部は文化教養学科を置く高等専修学校として開学します。

文化は社会を構成する個々人の教養が反映されて形となります。教養は多様で豊富な知識と体験をもとに思索を重ね、人が自分自身を主体的に生きるための指針となる「観」を自ら持とうとする意志から生まれるものです。単なる知識や経験の蓄積とは異なるものです。社会観や人間観などの「観」ですが、それは他者から与えられるものではなく、自分自身が様々な学びを通してその内実を作ってはじめて手に入れることができるものです。

人は気の遠くなるような長い思索の旅の途上で「個の尊重」という概念を手に入れました。普遍的な価値を内包している言葉であると思います。この言葉に内実を与え、未来を見据えることが現代を生きる私たちが最も大切にしなければならないことの一つだと思います。高等専修学校 珊瑚舎スコーレ高等部はそのような自立した個人として生徒自身が社会に立つための基盤となるような学びを生徒と共に作りたいと考えています。教養によって「個の尊重」に厚みや幅をもたせなければならないと考えます。人は「自分を創る」生きものです。その手助けをするのが学校です。「個の尊重」に裏打ちされた生徒それぞれの「観」の獲得の手助けをするのが高等専修学校・珊瑚舎スコーレ高等部の役割です。

学校教育の中核は授業です。学校は「授業」を通して生徒が「自分を創る」ための手助けをする場としてあります。授業という言葉の中に、学校の大きな可能性があると考えているのです。あらかじめ用意された知識や技術を身につけることを目的とした授業ではなく、生徒・教材・教員の三者の交流から生まれる力を育むことを目標とした授業がそれを可能にします。他者とのかかわりの中で自分を見つめ、納得できる「自分を創る」手助けをする場が学校なのです。珊瑚舎スコーレ高等部はそのような学校を作ろうとする「学びの同行者」が集う場でありたいと思っています。そこから生まれる創造性ある状況を珊瑚舎スコーレ高等部は学校文化と言っています。人に備わった成長と変容のドラマが生まれる舞台としての学校です。

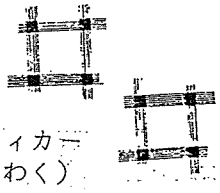
一人前として周りから認められるのに、人間ほど時間がかかる生き物はいません。長い時間をかけて人は育ちます。生涯育ちつづける生き物と言ってもいいほどです。どんな体験をし、何を感じ、何を考え、どう体を動かし、人や世の中や自然、そして自分と向い合ったのかで、その人の生き方、物の見方の基盤となる価値や思想の萌芽のようなものが形になってきます。自分自身や社会、あるいは諸々の現象や状況に内実と輪郭を与えようとする営みが「自分を創る」ということです。それは「自分の言葉を獲得する」ことと同義です。人間の成長や変容は自分の言葉の獲得とともにあるのです。珊瑚舎スコーレ高等部は、日常生活では体験できない、ほかの価値には置きかえることのできない「体験としての学び」を通して自由と、自立と、そして平和をもとめる意思を手に入れるための手助けをすることを目的としています。それは学校文化を作り続ける営みなのです。

高等専修学校は小規模でカリキュラム編成の自由度が高いという利点があります。さらに、大学受験資

格も取得できます。珊瑚舎スコーレ高等部が目指す授業は少人数クラス、小規模校であることが必要条件です。生徒全員が学びの同行者として互いを尊重できる人と人の近さが重要です。また、異質な他者と隣り合わせになることも極めて重要な体験になります。どのような規模の学び場を作るかは初等中等教育にとって大切な視点だと思います。さらに、沖縄という場の力を借りたカリキュラムをつくれることも重要です。沖縄は日本の一地方ではありません。日本列島の南端に位置し、南と西に開かれたもう一つの中心の地と言えます。５００年間で培った琉球文化は地球の宝と言っても過言ではありません。沖縄の文化、とりわけウチナーロが消滅の危機に直面していることは文化国家を自認する日本にとって由々しきことであり、珊瑚舎スコーレ高等部は沖縄の文化伝統を等身大の努力で生徒たちと受け継ぎたいと思います。

現在、ＮＰＯ法人が運営している珊瑚舎スコーレ高等部は２０２１年度から高等専修学校珊瑚舎スコーレ高等部として出発しようとしています。珊瑚舎スコーレ高等部での学びの体験が学校教育法という制度的な枠内で認知され、学歴として形にすることは開校２０年の節目を迎える珊瑚舎スコーレ高等部にとって重要なことだと思っています。２０１９年度の卒業生が残していった文章を引用して、設立趣意書の結びとします。以下略

※〔卒業生の残していった文章〕は「卒業するための言葉」に掲載しています。



カーヌティカー
（井戸のわく）

第１８回「春の学校・うりづん庭」特集

「春の学校・うりづん庭」は年度末、2 日間にわたってその年度の学習内容を様々な形で発表する場です。「まれ人講座」「生徒がつくる授業」、舞台発表、展示発表があります。

「卒業を祝う会」より

２０１９年度の卒業生は高等部の東佳祐、上野響生、夜間中学校の具志堅正雄の３名でした。初めて男子だけの卒業を祝う会となりました。３月８日に行われた「卒業を祝う会」で星野から卒業生に送られた言葉と、卒業生から珊瑚舎スコーレに送られた言葉を紹介いたします。

「東　佳祐君が珊瑚舎スコーレ高等部を
今日、卒業することを
みなさんと認め合うための辞」

きみにはじめて会ったのはもう十年近く前になりますか。京都だった。僕の話しを聞きに来たお母さんといっしょだった。小さかった。それがこんなに大きくなった。もちろん、大きくなったのは体だけじゃない。こういう言い方はえらそうでイヤなのですが、一度だけきみに言います。自分を入れる器が大きくなった。そう、思います。

自分を大切にするということは自分以外の他者を大切にすることだと、きみは気づきはじめている。だからきみは自分にも人にも優しくなれる。きみの宝物だ。

学びましょう。

愛するために学びましょう。

「卒業するための言葉」　　東　佳祐

今までとは違う学びができると思い中等部を飛び出し、私立の高校に進学した。実際に通ってみると、そんな学びはなかった。毎日毎日椅子に座り、黒板の文字をノートに写し、答えを探す日々だった。高校二年生になって、主体的に学ぶ事を忘れてしまっていた。

学ぶ事の大切さを再び気付かされたのは、この場所だった。

久しぶりにとぅんじーあしびーで珊瑚舎に顔を出

した時、生徒一人一人の目がこれまでかと思うぐらい輝いていた。パーティーだったからかもしれない。だけど、確かに見えない心の奥底に、珊瑚舎で学んでいる楽しさがあるのを感じてしまった。ふと、頭の中に毎日をボッーと過ごしていた自分が蘇った。悔しかった。同じ一日、一年を過ごしているはずなのに、全く別の時間を過ごしている人みたいだった。自分も楽しい学びをしたい。そんな思いでこの珊瑚舎スコーレに戻ってきた。

「初めから高校に進学しなければよかった」と思う後悔はなかった。二年間、珊瑚舎と違う場所で学べた事で、自分がしたい学びを見つけさせてくれた。

珊瑚舎に戻って来てからも学ぶことは沢山あった。意見が合わない人とどう対話するか、主体的に学ぶにはどうしたらいいか、毎日のように自分に問いかけて来た。もちろん、全てに答えがあるとは限らない。黒板ばかり眺めていても解決しない。そんなものばかりだった。その度に、自分で考え、沢山の人と意見をぶつけ合った。モヤモヤして、もう嫌だって立ち止まる時もあった。高校二年生の時の自分なら逃げていた気がする事も、自信を持って一歩踏み出すことが出来た。その先に自分のまだ知らない学びがあるとわかったからだ。

学びとは何か？私立の高校にいた二年間と珊瑚舎スコーレにいた一年間で自分なりに見つけることができた。常に自分の周りに存在し、意識しないと姿を現さない。その姿にも人それぞれの見方がある。人の考えと違って対立したり、モヤモヤしたりする。それでも、自分という人間を大きくしてくれる。自分なりの学びは、そういう事だった。椅子に座り続けなくてもいいと思うし、文字だけをにらめっこする必要もないと思う。みんなで何気ない会話をしてる時だって、がんまりで作業してる時間だって自分にとっては大切な学びの場だった。

そんな、大切な学び場から自分色で染められた大きな翼を広げ今日飛び立って行く。ここで学んだ事全てを離さないように大切に握りしめ、新しい場所に進んで行く。もしも、羽が傷ついて飛べなくなった時は、この場所を羽を休ませる大きなガジュマルとさせてください。

☆　☆　☆　☆　☆

「上野響生君が
珊瑚舎スコーレ高等部を
今日、卒業することを
みなさんと認め合うための辞」

きみは体験入学の時、船で世界一周の旅がしたい目を輝かせて言っていました。世界一周はできなかったけれど、それに匹敵するような体験をきみは珊瑚舎でしたのではないかと思っています。きみは英語を遊び道具と言ったことがあります。世界を旅するための道具のひとつということでしょう。知識や技術の習得は目的のための手段であるということを知っている。学びの本質です。きみがあこがれる奥の細道を書いた芭蕉も旅という道具を使いこなしました。すばらしい旅立ちを応援します。

学びましょう。

愛するために学びましょう。

「卒業の言葉」　　上野響生

卒業を前にして、焦る。まだ何もできてない自分。もっとやれたはずなのに。ほんの小さな迷いがだんだん大きくなっていく。大丈夫、俺は成長した。答えを見つけた。無理やり言い聞かせてる自分がいた。自分を騙して、納得しようとしていた。それに気づかず、何かが違う。本当はこうじゃない。と、言いようのない違和感を感じながら、もがく。

ふと、U-17 私たちの県民投票を思いだした。18歳以下の人に、辺野古の新基地に対してどう思うかを、問うために動いた。その中で誰かが言った。「種まきをしよう。今芽吹かなくても、考えるためのきっかけに。」あぁそうか、別になにかをなさなくてもいいんだ。俺はこの３年間で自分の中にたくさんの種をまいたんだ。たとえ今、花が咲いてなくてもいいんだ。霧が晴れた様に、視界がクリアになった。

目の前にはたくさんの道が続いている。それは珊瑚舎でもらった様々な視点によって、広がった。一つの面で見るのではなく、多方面から見ることで、自分の嫌いなこと、好きなことをより深く知れる。何より、自分が何も知らないということを知った。思索と実行を繰り返し、新しい見方を探して生きていく。たとえ時間がかかっても、楽しいと思える生き方。少し疲れたら、また帰ってくればいい。そう思えたから卒業する。珊瑚舎でやり残したものはたくさんある。ハーリーは優勝していない。がんまりにツリーハウスを作ってない。授業について話したいことが山ほどある。それでもなお、進みたいと強く思う。沖縄で過ごした時間、たくさんの人と出会い、話し、ぶつかった。その全てに気づきや、問い、学びがあった。だからこそ、自信を持って挑戦できる。出会えた全ての人への感謝と両手いっぱいのモヤモヤを抱えて、笑って歩いていきます。

☆　☆　☆　☆　☆

「具志堅正雄さんが
珊瑚舎スコーレ夜間中学校を
今日、卒業することを
みなさんと認め合うための辞」

あなたには願いがありました。いつの日か学校で学ぶことでした。その願いは八十四才になった時かないました。長かったですね。在学中、二度も入院しましたが、その都度、何もなかったかのような元気な姿であの階段を昇って来られました。学びのフェニックス！そう思いました。

教室のあなたは子供の頃のあなたを彷彿とさせるようにキラキラと輝いていました。学ぶ喜びがあなたの眼差しからあふれていました。素敵です。

学びましょう。

愛するために学びましょう。

「卒業するにあたって」　　具志堅正雄

私は、ずっと学校へ行きたいと思ってきました。でも私が行けるような学校がなかなか見つからず、あきらめかけていたころ、新聞で珊瑚舎スコーレ夜間中学の卒業生の記事を見ました。「エッ」と目をひらいて「私でも行けそうな学校があったんだー」とマジでびっくりしました。

珊瑚舎スコーレを訪ねたとき、遠藤先生から「いつからでもいらしてください」と言われても、まだ半信半疑でした。でも通っているうちに、自分が行きたかった場所がここだとわかりました。

夜間中学は私が思っていたようなかしこまったところではなく、授業、クラスメートとのおしゃべり、行事など楽しいところでした。

クラスメートのみなさんと学んできてわかったことがあります。「苦労してきたのは、私だけではない。みんな大変な苦労をしており、私と同じ気持ちだった」ということです。とても肩の荷が軽くなりました。

今おかれている状況から少しでも前へ進めるよう、与えられた場所で自分のやれることを発揮することが、大事だと強く思っています。

いつも楽しく学校へ通いました。感謝しかありません。

星野先生はじめ、珊瑚舎スコーレで手助けしてもらったみなさん、どうもありがとうございました。

～　卒業生におくる言葉　～

「卒業生に贈る言葉」　　中等部　山川虎雅

響生兄ちゃんへ

響生兄ちゃんとは２年間通していろいろ遊んだり、相談にのったりしてくれていっぱい思い出があります。その中でも今年ベランダで話をしたのを覚えてますか。その時に奇跡的に虹が出て、それが一番印象に残ってます。遊びでは、がんまりで鬼ごっこしてめっちゃ楽しかった。でも一つ心残りがあって、速いから一度も本気の響生兄ちゃんに対して勝った

ことはありません。それが卒業前にしたいことです。それと自分の不安定な時に、話にのってくれて、それで励まされたりしていろんな経験になった。そこから学んだことがあって感謝してます。

佳祐、最初の第一印象はちょっとチャラそうな人だなぁと思った。去年のうりづん庭で出会ったのが最初で、その時出し物をしてた。それでチャラそうだけどテンションいつも高そうなやばめの面白そうな人だなぁって思った。今年一年通して話しているうちに、その第一印象が変わって、意外と乙女でテンション高くて明るいのは変わらず、優しいんだなぁっていうのがわかった。しかも年下の僕に同じ目線で『よぉ、たいが！』っていつも話しかけてきてくれて、正直最初はとまどったけどめっちゃ嬉しかった。２人が海外行くって言ったときは、ちょっと寂しかった。佳祐は半年いてくれるって言ったから嬉しかったけど、その時の言い方が嫌だった。でも半年いてくれるって言ったから嬉しかった。

バレーボールを最近一緒にやってて、三人が一緒にできる最後のバレーが行けなかったから、心残り。さっき響生兄ちゃんが言ったように、ハーリーでやっぱり２位なのは悔しいから、今年戻ってくるよね？6月。がんばって戻って来てね。

最後に、もうすぐ響生兄ちゃんと佳祐と出会った４月が来ます。君たちがいない４月がくる。でも２人がいなくても頑張るね。珊瑚舎の生徒としては今年でさよならだけど、戻って来てね。ただしお土産話を持ってきてね。響生兄ちゃん、佳祐、卒業おめでとう。

「卒業生へおくる言葉」　間中学　小田ミヅエ

具志堅正雄さん、卒業おめでとうございます。具志堅さんとは二年間いっしょに、勉強しました。

いろんな事がありました。でも具志堅さんは、どんな時も動じずニコニコおだやかに、笑っていました。そんな具志堅さんの姿勢に教えられ、勇気をもらいました。

でも今年に入って学校を休みました。ニコニコしている私達の級長が病気で休んだのです。でも病をおして、家族の協力もあって帰って来たのです。

級長の号令のもと授業が始まりました。新しい年の幕があきました。私達は又勇気づけられ勉強することができました。

でも具志堅さんは今日卒業なさいます。　おめでとうございます。

私達はさびしいので「さようなら」は言いません。又会いましょう。クラスの級長、長い間ありがとうございました。

クラス会やりましょう。連絡します。クラス一同より

がじゅまる
しんかぬちゃー

（生徒・学生のコーナーです）

「うりづん庭」では「生徒が作る授業」を毎年行っています。２０１９年度の授業は「ボディーアート」「世にも奇妙な植物論が来た！」の２本でした。「ボディーアート」では地域によって異なる文化的慣習や歴史を紹介しながら、現在に至るまで続くボディーアートに関する様々な視点を持った問いを参加者へ投げかけました。「植物論」では、グループにわかれて新種の植物制作をするという授業でした。それぞれ授業を作った生徒達の感想を紹介します。

生徒が作る授業を振り返って「ﾎﾞﾃﾞｨｰｱｰﾄ」

高等部　山下　夏悠

珊瑚舎に入学してから耳にタコができるほど言われてきた言葉、「生徒が作る授業はやばい」。まにまに祭やとぅんじーあしびを合体させたような行事であるうりづん庭の中で、最も重要視されているであろうものが「生徒が作る授業」だ。やばくない訳がない。

冬休みが明けてすぐ、生徒が作る授業の準備は始まった。まず、授業のテーマをどうするか。色々面白そうな候補が挙がってはいたが、私はボディーアート一択であった。実際にタトゥーを入れているし、ピアスも開いている。秋頃にハジチという存在を知ってしまった、ということもこのテーマを選んだ理由の一つである。

授業作りを進めるにあたり、まず初めにボディーアートとは何なのか、そんな所から調べを進めていった。ここで軽く説明しておくと、ボディーアートとは顔や身体に装飾を施すことの総称であり、ピアスやタトゥーの他にもメイクやネイル、ヘアカラーなども含まれる。情報を集めていく段階では、順調に作業が進んでいるように見えた。しかし、いざ授業をどう進めるか考えてみると、全く良い案が浮かばなかった。そもそも授業とは何なのか。調べ感じたことを発表するだけなら、それはただのプレゼンである。主体的で対話的な授業にする為には、どう進めていけばいいのか。完全に煮詰まっている時、講師が「このグループは発表の方向性が定まりすぎている」と言った。この言葉がなければ、恐らく私達の作る授業はとてもつまらない物になっていただろう。差別や偏見を無くしたいという気持ちはもちろんあるが、そこに注目しすぎるのではなく、タトゥーやピアスについて少しでも興味を持って貰えたらそれでいいのでは？と意見がまとまった。もちろんその後も紆余曲折はあったが、アンケートを見た限りでは良い授業を作れたのではと感じている。

授業が終わり、ボディーアートに興味のなかったメンバーが「ピアス開けてみようかな。」と言ってくれた。この一言は授業が成功したのだと私に確信させてくれた。

「世にも奇妙な植物論が来た！」

高等部　城間柚花

ボディアートの方に高等部がほとんどいて、植物の方に初等部と中等部がほとんどで、どっちもどっちかなって思った。ボディアートの方は、空気がぴりつきそうでその場を収拾するのが大変そう。植物の方はまとめるのが大変そう、って考えた時に、どっちも大変そうならどっちが意見をより言えるか、で選んだのが植物なのであーる。

一回目の話し合いをシンカ会議の時間でやったんだけど、丁度その時に別の予定が入っていて、初・中等部が仮想植物をやろう！と決めてくれた事には正直助かった。しかし、二回目の話し合いの時「みんなが授業を通して、授業を受けにきた人に何を伝えたい？何を知ってほしい？」と質問をした。仮想植物で授業をする事は良い案だと思う。講師側から一方的ではないし、楽しくなるのでは、と思った。だけどそれ以上に、この授業で何を知ってほしいのか分からなかった。なのでまず、図書館で植物について調べ、共有し、授業で何を知ってほしいのか、個人個人が意見をまとめる時間を取った。その結果みんなの伝えたい事は総合して『魅力』であった。

うりづん庭準備期間が始まって、系統図を書いたり、授業内容を決めたりと結構順調に進んだ。生徒がつくる授業・植物チーム。うりづん庭準備期間二週目の月曜日、その週末が本番というタイミングで、「植物の授業、こんなんでいいのかね？このままだと仮想植物メインなのでは？」なんて質問したら、「なんでこのタイミングで？」という視線を頂戴しました。でも、柔らかい脳みそをお持ちの人達なので「福笑いみたいにすれば？」なんて言うんですよ。そしたら「パーツは封筒に入れたら良いんじゃん？」って言うからその方向で決まっていった。系統図は作っていたから授業に組み込ませる様に授業のやり

方を組んだり、パーツを作ったりと決まってからが早かった。本番前日も軽く流れを確認して終わった。当日、ボディアートの授業を受けて、成程なと思った。違う感じの授業だったから。でも考える点でいうと勝ったなとも思った。

１０分の休憩を挟んで本番。それ程緊張は無かった。植物の説明が終わり、授業のメイン新しい植物を作る時間、来てくれた人達が楽しそうに喋りながら作っていてほっとしている。何より新しい植物を作って興味が湧いたと、書いてくれた人が沢山居て嬉しい限りである。しかし未だ直すべき所は多数あった。そこを見直し次に繋げて行きたいと思う。

ふくぎのふぁー

（講師・スタッフのコーナーです）

「シンカソング」　　木村華子

こんにちは。

1年間瓜田麻衣さんと共にシンカソングの講師をさせて頂いた木村華子です。普段はシンガーソングライターとしてライブをしたり、音楽制作の仕事やボイトレ（ボイストレーニング）の先生もしています。

小さい頃から父親の仕事の関係で引っ越しが多く、北は北海道、西は広島と津々浦々の場所で暮らしてきました。お友達も家もどんどん変わって行く環境で育つ中、小さい頃に始めたエレクトーンや歌う事はずっと変わらずそばにありました。中学生くらいからは、目の前の風景を忘れないように、また上手く消化できない気持ちを日記や詩に書き留めたり、それが今の活動へ繋がっているように思います。馴染めなかったり、寂しかったりという思い出もありますが、国内でもこんなに人の考え方や暮らし方、自然の力、食べ物、方言も違うんだな、前の学校では評価されたことが全く通用しなかったり、その反対もあったり、人が決める“自分の評価”って何だろうということを考えたり、貴重な経験を沢山できたと思っています。

さて、そんな私が珊瑚舎スコーレに出会いました。珊瑚舎の空気を知るにも前期はたまに現れる代打講師として生徒との距離感がなかなかつかめず、もっとみんなの事知りたかったという気持ちが残りました。後期からは切り替えて、自分も楽しいなと思える事でみんなと80分を作っていけばいいのかもしれないと替え歌ワークショップ等“作る”をテーマに投げかけてみたら、みんながとっても生き生きとしてエネルギーが溢れて来たのを今でも嬉しくて覚えています。

私が教えることなんて何もなくて、生徒たちが主体的に決めていくこと、動いていくことに少しアドバイスしたりする程度。個性が強くても独裁にはならず、話してぶつかってみんなで決めて進んでいく姿をみて、学ばせてもらったのは私の方だったと思います。学習発表会で歌った渾身のオリジナルソング“黄胡蝶（オオゴチョウ）”は、歌詞がまさに珊瑚舎スコーレそのもので、ピアノを弾きながら胸が熱くなりました。間違いなく私にとって新しい扉を開いてくれた場所です。珊瑚舎の皆さん、本当にありがとうございました。またいつかどこかで！

子どもがんまり便り

「 子どもがんまりの感想」

参加保護者　大城豊和

去った2月2日、子どもがんまりに参加しました。この日は長女の10歳の誕生日。何がしたい？との質問に「がんまりに行きたい！」との事。妻、次女、

長男を引き連れて（ん？私が連れられて？）家族全員で草木染めを体験する事になりました。

天気はまずまず。少し肌寒いかな？でも参加している子ども達には関係ありません。草木染めの説明もホドホドに…追いかけっこを始めたり、焚き火ごっこ、ターザンやブランコ、それからカッターナイフで枝を削って「ナイフ」を作ってみたり…ガンマリの名に恥じない行動力!!ハラハラするのはいつも大人ばかり。

いざ草木染めの作業が始まると、協力しながら材料のフクギの葉を集めたり、トートバッグに模様をつけるために輪ゴムで絞ったりと、さすがの集中力。あっという間に作業終了。すぐさまお気に入りの遊びへ向かう子ども達。大人はといえば、フクギ染めに興味深々。フクギの葉を煮詰めて色をつけ、錆などで色を定着させて…工程の珍しさに、その場からなかなか離れられませんでした。

城間さん、貴重な体験ありがとうございました。

みんなで輪になって食べるお昼ご飯はやっぱり美味しいね～。その後は、焚き火で焼き芋&焼きマシュマロ&焼きリンゴ！中学生のリーダーを中心に焚き火部隊が大活躍！かっこよかったね～。

それまで、女子、男子で別れて遊んでいたのに、「そろそろ帰るよー」の声も届かないくらい、いつの間にかみんなで仲良く走り回っていました。

いつものキラキラした光景が広がっていました。まだまだ語りたりませんが…お！長女&次女の感想文ができあがったようです。それではどうぞ！

『ふくぎぞめっておもしろい』（長女 10 歳）

今日の山がんまりで、ふくぎぞめをしました。最初に、みんなで、ふくぎの葉っぱをさがしました。次に、葉っぱをきって、ボウルにいれていきました。その次に輪ゴムをつかって、丸くなるようにいろいろなところに結びました。どうなるか楽しみにしていました。そして、完成したかばんの輪ゴムをはずしてみると、きれいなもようになっていました。とてもすごいと思いました。大切に使いたいです。

『ふくぎぞめってたのしいな』（次女７歳）

てきとうにやってもどんなようにやってもいろんなかたちにしてもかわいくておもしろい。

★　★事務局便り　★　★

★　３月８日夜間中学生１人と高等部２名が卒業しました。お祝いのパーティーは飲食なしでしたが、３人の晴れやかな笑顔が印象的でした。８７歳の夜間中学生は病を克服しての卒業です。これからも学び続けたいという思いに胸打たれます。

★　「菜の花の沖縄日記　ちむぐりさ」

３０日から東京東中野ポレポレ座で上映予定です。この時世ですから映画館にお確かめの上お出かけ下さい。

★　★　★

●今年度（２月１日～３月 31 日）寄付・カンパを頂いた方々
石田みどり鹿糠文子坂本和子岡村健手塚賢至照本祥敬市野寿子当山幸江森口美千恵三浦幸子山田道子助川寿美子式部恵子丹羽雅代與儀勝子与那覇晴海湯本貴和上田秀一大城喜春北上田登久子盛口佳子真津昭夫家門収一長嶺由紀子橋川由美子小渡律子幸地江美子城間あずき松茂良米子名城悦子所扶久代石野裕子矢崎智章尾崎せき松田晴代萩原真美城間栄順村上呂理伊波雅子仲里博彦下地孝野村佳雄西山哲平智海竹内新野村佳雄株）サンシャイン上野きより高坂嘉孝安田圭太郎谷川俊太郎中地八重子今泉美代子田中由香子泉恵子宮城玲子横山美保子友寄和子有銘雅子武義和高橋泰子古堅苗志賀マサ子穴田浩一高良勉中山きく野原京子有）ラボータ翁長巳酉東佳祐上野響生黒田瑞江島田ハル辻口光生西原邦男西田悦子住田景子鈴木和男ダイキンオーッキド翁長貞子曽田蕭子内田俊夫照屋まち子

発行者　：珊瑚舎スコーレ事務局　遠藤知子
住　所　：〒900-0022　那覇市樋川 1-28-1-3F
Tel　：098-836-9011　Fax：098-836-9070
Mail　：sango@nirai.ne.jp
URL　：http://www.sangosya.com